

第二回 大風の吹いた日

—

ちよつとしたひだまりの中、老人がのんびりと話していた。

むかしな、むかし…そう、ずいぶんむかしじゃ。わしがまだ子供のころじゃからな。夏の終わりになると、村はいつつも大風に襲われとつたもんじゃ。

老人のそばには、小さな女の子がいた。つつかえながら出てくる話を、一つも逃すまいとするように、その小さな目を見開いて聞いていた。

この村は妙な村じゃ。まわりは砂に囲まれているというのに、ここだけには水がある。夏には涼しい風が吹き、冬には暖かい

風が吹く。砂漠の真ん中で、これほど過にし易い場所があるじゃろうか。

老人は、ふと微笑んだ。

これはな、みんな風使いがやっておるんじゃ。

み～んな？

そう、み～んなじゃ。

風衣という、向こうがすけて見えるような薄い衣を纏うてな。わしらのために、大風を治めてたり、風で村を守ったりする。これが風使いじゃよ。いまは伝説とか言うておるが、ほんの四、五十年ほど前は目の前におつたわ。

お前も、いつか見るじゃろうな…彼らがつけるあの衣は、わしらの守り神じゃ。いつでも、必ずわしらのそばにおるはずじゃよ。

老人は女の子の頭に手をやると、いとおしげに撫でた。

ねえおじいちゃん、その衣、あたしにもつけられるかな。

老人は顔を崩して言った。

そうさな…それは颯ササにでも聞かにはわからんな。

颯さんって、おじいちゃんのおともだちだよね。どこにいるの？あたし聞いてくる。

今はもうおらんよ。もう四十年前も前にいなくなつてなあ…

死んじやつたの？

…みんなそつ言つんじやが、わしはそつは思わんな。今だつて、すぐそばにいるよ。うな気がするんじやよ。すぐそばに、のあ…

少女は小首を傾かげて、次の言葉を待った。しかし、老人はもう口を開くつもりはないようだ。

少女は、ただ黙って老人の顔を見つめた。その顔からは、よい友人を持った誇りのようなものが、はつきりと感じられていた。

二

それから十年近くが経たった。少女は十六の娘となり、老人は…もはやこの世の人ではなくなっていた。そんな、ある日のこと。

「召ツヨク鈴、一ツつち一ツつち！」

「ちよつと待つて、いま行くから！」

娘は砂で汚れた胡服を身につけて、家を出て行くとした。

「ちよつと待ちなさい、召ツヨク鈴」

「だいじよぶよ、あぶないとこへは行かないから。じゃ、行ってきまあす！」

3 第二回 大風の吹いた日

「ばたばたと駆け出す音が遠ざかって行く。母親はやれやれといった風のため息をつく。洗濯の続きをはじめた。」

「いいお天気ですね」

顔を上げるまでもない。お隣さんの声だった。

「まったく、いい天気ですね！暑くて暑くてしょうがないわ！」

「そう言えは変ねえ。いつも今頃は涼しい風が吹いてくるはずなのに……」

「風使い様はおやすみなじやないかしらねえ」

垣根から身を乗り出した夫人は、ちよつと鼻で笑つて、

「あなた、まだそんなもの信じてるの？風使いなんて、ただの伝説でしょ？」

「別に。あたしはどつちでもいいけどね。もうちよつと涼しくなるんなら、信じたつて損ないわよ」

二人はちらと視線をからめて、大きく笑った。

三

子供たちの遊び場というものは、今もむかしも大差はない。子供というには少々歳をとりすぎた彼らにとつても、それは同じだった。

「魯くん、今日はどこ行くつもりなの？」

娘：召鈴は小さな子供たちをまわりに引き連れて歩いている。

「そうだね……あの鍛冶屋なんかどうだい？」

問われた少年：魯成は、これまた小さい子を肩車して、ひよこひよこ調子を取りながら歩いている。

「あのおばけ屋敷？」

「みんな行くよな」

まわりの子供たちが一斉に歓声を上げた。これでは反対できようもない。

鍛冶屋の家は、いまは空き家である。数十年前、主が突然いなくなつてから、扉はきつちりと閉められたままになっている。が、夜中にこの前を通ると、

どこからともなく不気味な声が聞こえるので、『おばけ屋敷』が通り名になってしまっていた。

子供たちは、壁の割れ目から中へ入った。うつすらと火の臭いがする。

「ふ〜ん、これがおばけ屋敷の中なんだあ」

小さな子供が、感心したように言う。

「う〜ん、やっぱり普通の家かあ」

魯成の方はつまらなそうに言った。

「お〜い、召！面白そうじゃないし、出ようか？」

「わかった。火桶ひおけを動かせばいいのね」

「へ？」

召鈴が奥にある火桶に手をかけた。魯成は思わず駆け寄って、

「おい、しっかりしろよ。だれも火桶なんて言っていないじゃないか」

「いま言ってたじゃない。聞こえなかった？」

言いながらも火桶を押す。ぐく、という重い音がだんだん大きくなり、灰がそこらじゅうに舞った。

「ま、まさか本当におばけ屋敷…まずいぞ召、離れろ！」

娘の腕を掴んで引つ張ろうとした…が、そこに掴む腕はなかった。いつのまにか召鈴が消えていたのだ。

四

娘は、床下にいた。真つ暗な中に、ぼあつと浮かんでいるものが見える。短い階段を降りて、木の焼け焦げる臭いがする狭い通路を通ると、その先にちいさな部屋があった。光はそこから来ている。そあつと近寄って、部屋の中に首だけひよい、とだしてみえる。そのとたん、頭の中に声が響いた！

（よあ、召園ツァオヤン！やはり持つべきものは友じゃな。

さ、遠慮せんところちへ来てくれ。ちと手伝って欲しいことが出来てのお…）

召鈴は混乱した。

「だれ？なんでおじいちゃんの名前知ってるの？」

5 第二回 大風の吹いた日

頭の声が一瞬戸惑って、それからやや気落ちしたように

(そうか…そうじゃな。あれからもう五十年近く経つんじや。召園が来るはずもないか…)

『五十年』。その一言で娘ははつとした。おじいちゃんから聞いた話、おじいちゃんの一歩の友達、まさか…

「まさか…まさか、颯さん!? おじいちゃんの言った、風使いの颯さんなの?」

(ほほお、召園はわしのことを覚えておったか。

さよう、わしがその颯じや。お前の目の前にある、衣の中におる)

娘はとことこと衣の前まで近寄って、それを撫でた。薄い。それでいてまとわり付かない。不思議とか言いようのない布だった。

「さつき言つてた、『手伝つて欲しいこと』って、なんなの?」

今度は衣の中の男…颯の方が驚いた。

(お前は、わしが恐くはないのか? 衣の中にいるなど、不気味ではないのか?)

「どうして? おじいちゃんはよく言つてたよ。颯さんは最高の風使いだって。ときどき変なこともあるけど、それを差し引いても最高の友達だ、って。それに、そばにいてわかるもん。ちっともこわくないよ。それで、なにを手伝えばいいの?」

しばらく、声が途絶えた。颯は感動していたのだ。

ああ、私は本当によい友人を持った、と。

(…ではすまないが、この衣を着てもらえんかな)

「着ていいの」

(もちろん、召園の孫なら大歓迎じや。ましてやお

前は風使いの素質があるしの)

「素質って?」

(わからんのか? お前のまわりには風が集まつておるぞ。しかもみな喜んでおる)

わけのわからないまま、娘は衣をかぶった。布はゆらゆらと体のまわりを漂っていたが、やがている

べき場所を捜し出し、ぴたりとおさまった。

五

（うむ。問題ないようじゃな。では、お前の力を少し借りるぞ）

「力つて？」

（わしがこの衣にすべての力と心を封じ込めてから五十年経つが、もう風使いとして十分に働くほどの力がないのじゃよ。最近、天候がおかしいじゃろつ。直そうとしとるんじゃが、どうにも…な）

「ふうん。で、あたしは何をすればいいの？」

（今は別になにもせんていい。そのうち、覚えるじゃろつ。風使いの仕事を、の）

「颯しいちゃん…つて、呼んでもいい？」

（もちろんじゃとも。わしも名前で呼ぶとしよう。ええと、なんと言ったかの…）

「あたしは召鈴ツツオウリン。おじいちゃんから一字もらったのよ」

（そうか、では小召シマオツツアオと呼ぼうか）

消えたときと同じように、娘は突然現れた。

「召！おい、お前どこ行ってたんだよ。みんな心配してたんだぞ！」

「いっちゃん心配してたの、魯兄ちゃんだよね〜」
他の子供たちがこれに和する。魯成は真つ赤になりながら手で追い払った。

「ごめんね、心配かけちゃって。でもだいじよぶだよ。さ、おもて行こう〜！」

微笑みながら鍛冶屋を出てゆく娘を、魯成は不思議な気持ちで追っていた。

顔の赤みはまだとれない。子供たちにからかわれながら、だけではなく、なにか…今までと違う雰囲気、彼の心をとらえていた。

路地に出た子供たちは、こんどは北の池に向かって歩いて行く。召鈴の家の前を通ったとき、娘が母親に訊いた。

7 第二回 大風の吹いた日

「ねえおかあさん、今日の天気どう思う?」
「そりゃ、暑いに決まって…」
え、おや、そういえばいい風が来てるね。風使
様が起きたのかしら?」
娘はくすくすと笑って、その場を離れた。

六

「頭あ。今日もこれだけですぜ」
風使いの住む村から、西へ少々行ったところに、馬
にまたがった一団がたむろしていた。群の中ほどに
いる、頭と呼ばれた男は、話しかけてきた男の手に
握られていた包みを無造作にひったくると、自ら中
身をあらためた。
「ちつ! しけてやがる。…うむう。いくら、都にい
ちやあ、お上に捕まっちゃうとはいえ、ちいとばっか
し西に行きすぎたか。こんなとこじゃ、たとえこの
世宝シバオ一味といえども干上がっちゃうぜ。さあて、どっ

ちに行つたもんか…」
「目当てならありますぜ、お頭あ」
妙な節をつけて、一人の男が近寄ってきた。
「おう、世角シラマオか。目当てはいいが、おめえはあてん
なんねえからなあ」
世角と呼ばれた男は、口の端だけでにやりと笑った。
「つい最近でさ。あの砂漠のど真ん中に、なんと玉ぎまぐ
を出す村を見つけたってえ話がありやして」
「玉だとお! おい、いい加減なこと言つのもたいが
いにしろい! この砂漠のどこにそんなもんがあるつ
てえんだ!」
「そう怒つちやいけやせんぜ、お頭あ」
いやらしい節を聞いて、世宝は己を取り戻した。
「第一、そんなとこがあるんなら、なんで他の連中
が知らねえんだ?」
「それがですなえ、そのまわりだけ風が強くて、い
ままで見つからなかつたんでさあ。たまたま風の弱
いときに出つくわしたんで分かつたってえわけで」

「なあるほど。偶然ならおめえにも見つかるわけだな。よし、こんだあそいつを狙って見つかあ！」

七

その日も、村は平穏だった。

男たちは、鍬を片手に畑へ向かっていた。

何もかも、昨日と同じだった。この時までには。

よいしょ、と鍬を持ち上げた男の動きが、突然止まった。そのまま、ものも言わずに崩れ落ちて行く。

ぎよつとしたまわりの男たちが顔を上げる。その

まま崩れ落ちる者が何人か出た。矢であった。

地面に伏せながら、男の一人が矢の飛んでくる方向を見た。

黒地に白の染め抜きで『世』の一字を入れた小旗

「し、世宝だ！世宝一味が来たぞあ」

世宝の名前は、この砂漠周辺に広まっていた。老人から子供まで知らぬ者のない、凶悪無双の盗賊団で

ある。

男たちは体を縮めながらも急いで村へ引き上げて行った。

八

村にも自衛団はある。弓矢・槍・剣・盾など、みなそれぞれ身につけて東の畑へ向かって行った。

「父さん、父さんは！」

集会場に飛び込んだできたのは、魯成だった。

「父さんが畑から戻らないんです。誰か知りませんか？」

集まっていた中の一人が立ち上がって、少年の肩に手をかけた。

「すまん。助けられなかった」

「そんな……」

「あの人は、俺たちを逃すために、盾になってくれたんだ。…あの人がいなけりゃ、俺たちや武器を取

9 第二回 大風の吹いた日

る間もなく、滅ぼされていたよ」

肩に置かれた手を振り払い、魯成は表へ飛び出した。駆け出して行く少年の後ろ姿を、召鈴の目がずっと追っていた。

「颯いちゃん、なにか……わたしにも何かできないの?」

(ふむ。そうじゃな……玉でできた壺つぼか瓶かめがないかの?できれば大きいのがよいが……)

「玉の壺?…それを、どうするつもりなの?」

(ま、わしにまかせることじゃ。そうじゃ、あの少年にも一役買ってもらわねばならんかの……)

九

魯成は、父の残したぼろぼろの胸当てをつけて、家を飛び出した。そこへ後ろから声がかかる。

「魯くん、ちょっと手伝ってくれない?」

「忙しいんだよ。後にしてくれ」

振り向いたその目の前に、美しい衣をつけた幼なじみの姿があった。

「おま……お前、その姿!」

風使いは壊れかけた玉の壺を差し出して、言った。

「これを、相手の目の前に置いてきて欲しいの。お願いよ、風使いとしての」

十

村の北東、最前線。戦況はすでに定まっていた。

「くそっ!腕がちがいきるっ!」

「くっ!風使い……伝説の風使いさえおわせば!」

地を叩いて悔しがる者。しゃにむに斬りかかろうとする者。

みな的心中には、『絶望』の二字しかなかった。

そのとき、背後から声がした。

「いるぞっ!」

風使いはいる!俺達の後ろに!」

ぎよつとして声の方を見る。と、目にも鮮やかな白い衣を纏った人影が一つ。その衣の薄さ、その出で立ち、あれはまさしく……

「で、伝説の……風使いさまじゃ!!」

矢を補給していた老人の叫びに、村人の心が一つになった。

(勝てる!!)

そう、誰もが思った。

「みんな、援護してくれ! 風使い様の頼みだ!」

壺を持った魯成が、走りながら叫びまくる。

「魯、俺達の後ろへ!!」

昔なじみの二人が前に立った。そのまま三人が相手の真ん中へ走り込んで行く。まわりの大人たちが、死に物狂いで矢を射かける。さすがの盜賊も、この勢いには気圧された。

その隙をついて、三人組は敵のまん前まで駆け寄り、壺をおくやいなや全速力で逃げ帰った。

大人たちの矢もそろそろ尽きかけている。頃合を

見て、魯成が叫んだ。

「召鈴、やれえッ!!」

それと同時に、耳を押さえて地面に伏せた。他の二人もこれに従う。

召鈴は、魯成の声を聞くと目を開いた。

「壺の中に、風、ね?」

(そうじゃ……大丈夫、お前ならやれる!!)

ふう、と大きく一息ついて、目を閉じる。まぶたの裏に、あの壺が浮かんだ。

「風……、私に資格があるのなら、願いを聞いて……」

まわりの音が、すうっと退いて、自分にまとわりつく風たちの声が取って替わった。

「今ひとたび、そのお力を……あの壺の中へ!!」

ぱつと目を開く。そこには、一里近くも離れているはずの壺がはつきりと写っていた。

と、壺の中にいきなり小さな竜巻が生じる。竜巻はだんだん大きくなり、ついに壺を粉々に砕いた。

11 第二回 大風の吹いた日

「風よ、向こうへー!」

新しい風が、砕けたばかりの壺の破片を巻き込み、散らしながら盗賊たちを襲って行く。とたんに、馬は跳ねまわり、人間は身悶えした。

なにせ、玉の破片である。こまかなとげが目やら耳やら、体の柔らかい部分すべてにつき刺さってくるのだ。耐えられる方が不思議と言つものだろう。

「ひ…退けえッ!」

頭の言葉を待つまでもなく、盗賊たちは四方へ逃げ去っていた。

じつと様子を見つめていた召鈴が、ほう、っと息を吐いた。

「なんとか、終わったわね!」

安堵の口調になる娘に対して、頭の声は遙かに沈んでいた。

(いや、これからが大変じゃ。このまま引き上げたのでは、あやつらの面目が潰れてしまうからの)

「また、来るの!」

(多分…いや、きつと、な)

召鈴は親指をぎゅっと噛みしめて、考え込んだ。

(次はな、次はやつらも、用心するじゃろつ。玉壺の破片くらいではたじろがんぞ。かと言って、今のわしらにはそれ以上の力はないし…それに、今度はお前を狙ってくるかもしれんしの)

「うん。みんなだつて命がけなんだもん、そのくらい覚悟してるわ。でも、どうすれば…これ以上どうやってみんなを守つたらいいのかしら…」

突然、颯の口調が微笑んだ。

(よし、よく言った! そついう考えならば策はある。…さて、ではまずわしらの、風使いの歴史から、話してやるつかの…)

その晩、村長の家に、村の主だった者たちがすべ
て集まった。彼らはちよつとした居間の椅子に半円
状に腰掛けて、弧の開いている側に座る一人の娘を
見据えていた。

「みなさん、お集まりください。有難うございます。
今日の盗賊たちのことでご相談があります。…」

緊張した娘の声に、全員がざわついた。

「それはいいんじやがな、あやつらがまたやつて来
るといふ確かな証拠でもあるのかな。君の杞憂きゆうじゃ
ないのかね?」

魯成が立ち上がった。

「相手は世宝一味です。欲のためなら何でもする奴
らですよ。ましてやこんな素人の集団に追い返され
たんじゃ面子が立ちません。必ず来ます…必ず!」
若者の勢いに、ひととき場がしんと静まる。その
静寂の中、微かすかだが力強い声が響いた。

「うるさいのお、落ち着いて寝ることもできません
ないか」

声は、そこに居る誰のものでもない。ただ召鈴だ
けが、今までずっと聞いていたものであった。ただ
し、頭の中で。

「颯エいちゃん!しゃ、しゃべれるの!!」

「ふおつふおつ…」

驚いたようじゃな。…良く見てみい、お前の着と
る衣が、風で動いておるうが」

言われてみれば、確かに、声と同時に衣が動いて、
布と布とがこすれあっている。

「五十年の歳月をかけて、やっと会得えとくした技じゃ。ま
いったか!」

…とはいえ、目め一杯いっぱい大声を出しても、こつこつ静
かな場所であれば、いとも気付いてくれん。まっ
たく、からだというものは、そう簡単に捨てるもの
ではないのお」

「ほ、本当に颯エ風師フウシどのでいらつしゃいますか!?!」

13 第二回 大風の吹いた日

村長が目をパチクリとしながら、問いかけた。

「ああ、そうじゃよ、哉坊。信じられんというのなら、むかしお前がやった悪さをここでバラしてもかまわんが……」

「い、いえ、むかしの呼び名を知っているだけで十分です！」

「そつか、残念だの。」

さて、皆の衆。わしのことをまだ風使いと思つてくれるのなら、この娘の話を聞いてやつては下さらんか。

この娘はたいしたものだ。なにせ、わしがこの五十年というもの、ずっと悩み続けた問題を、たった三言で決断しおつたんじゃからな。

正直に言つて、もうわしは、この娘の足元にも及ばんよ。

……さ、この娘の話を、聞いてくれるか？」

集まった全員が、姿勢を正して頷いた。

召鈴が、話を始めた。

それは、とても長い話だったが、座にいた者の中には、席を立つ者はおろか、途中でロウソクが消えたのに気づいた者すらいなかった。

長い、長い話が終り、みんなが周囲の間に気が付いた頃、村長が口を開いた。

「風師召鈴どの。村を……村人を、どうぞよろしくお願い致します！」

彼の頭が下がると同時に、そこにいた全員が召鈴に礼をとつた。

十二

翌日。召鈴は衣を纏つて、村のあちこちをまわっていた。

歩き回りながら、娘は昨日自分が言つた言葉を思い出していた。

『風使いがいなくなつたらどうなるか、ご存知でしょ』

うか？今まで抑えられてきた風たちがいつぱんに吹き荒れて、村はひとたまりもなく消し飛んでしまふんですよ』

村の北にある池のすみで、衣に付いている羽根飾りのようなものを一つ取り、水に沈めた。すると、池の底の方で、なにかが動いたような気がした。

『むかし、風使いの跡継ぎはすぐに見つかつたそうです。でも、颯じいちゃんのおじいちゃんが跡継ぎを見つけるには二十年かかつてます。そして颯じいちゃんが私を見つけるまでは、四十年…それも体をなくしたあとで、です。風使いは、風使いになれる人は、もうほとんど居ないんです』

東の方には、召鈴のひいおじいちゃんが作った大きな畑がある。この真ん中、鳥よけの人形の足元に羽根飾りを置くと、それはすつと地面に消えた。

『もともとこの村は、天地の理に逆らっているんです。いつかは正さなくてはいけない…風使いになつた人、みんながそう思いながら、この村の人達を氣遣つ

て、思い止まってきた』

西へ向かうと、玉の鉾山が見える。その入り口近くにある、小さな亀裂のようなものの中へ羽根飾りの端を差し込むと、ずるつと中へ引き込まれた。

『でも、いまは状況が違います！いま村の人たちを氣遣うなら…』

村の南側、砂漠の近くには、『乾丘』と呼ばれる高い丘がある。ここで最後の羽根飾りを丘の窪みに投げ入れた。と、羽根飾りは一瞬にして燃え上がり、見る間に燃え尽きてしまった。

「これで、全部ね」

（ああ。あとは、この風衣だけじゃ。なんとか間におつたようじゃな）

「ほんと、そうみたいね。見て」

北の方に、砂煙が見えた。遙か遠くに見えるその量からしても、膨大な数の人馬が向かつてきていることは間違いなかった。

（さて、仕上げといくか。…召鈴、風衣を脱ぐんじゃ）

15 第二回 大風の吹いた日

娘はこくりと頷いて、衣の右肩を外した。とたんに衣はただの布となって、その腕におさまる。

(ちよつと待つておれよ)

布の一部が複雑に絡みはじめた。やがてそれは小さな羽根のようになって、他の布から分かれていった。

(さ、これを髪にでもさしておくといひ)

「何なの、これ?」

(お守りというかな、わしらの最後の武器じゃよ。風衣はもともと風を封じ込めた布じゃからな、それだけでも、相当大きな竜巻ができる。ただし…)

頭の中の声が口籠くちかった。

「ただし?」

(ただし、竜巻はこれを使った瞬間に生じる。要するに、使った者も巻き込まれるわけじゃよ)

娘はなんだ、というような表情で布に話しかけた。

「別にいらぬよ、こんなもの。だつて、颯さつしいちゃんがついてれば、風は使えるんでしょう?」

(…わかつたらんようじゃな。わしは、ここでお別

れなんじゃよ)

「え!」

驚いた拍子に、娘の手から布が落ちた。が、布は地面には付かず、ふわり、と浮かんで、そのまま村の方へ飛んで行った。

「待つて!」

(来るでない!)

今まで聞いたことのないような強い調子に、召鈴は動けなくなつた。

(さっき言ったことはこの布とて同じこと。この布の封を解けば、その場で竜巻が生じるんじゃよ。それと同時に、いままで抑えられていた風たちが一気にこの村を襲つ…逃げる暇などないわ)

「そ、そんな…!」

娘はその場に崩れた。目線は宙をさまよひ、手が空を掴もうとしている。

(悲しむな、召鈴。わしはな、わしは、この日を待つとつたんじゃ。風使いになつた日から、ずっとな。

なるうことなら、自分の手で風たちを解放してやりたかつたんじゃ。その夢が、いまかなう。もう、何の心残りもないわ……)

「颯…じいちゃん…」

(あとは頼むぞ。南か、東か…どこかの土地で、こんどこそ真つ当な村を、こんな心配をしないですむ村を、作るんじゃぞ…)

召鈴は顔を上げた。人馬じんばの起こす砂煙は、相当近くに見えてきている。そこに、いきなり巨大な竜巻が生じた。

村の四方に留とどまっていた風が、堰せきを切ったかのようになり、竜巻に向かって押し寄せてゆく。竜巻は、それらすべてを巻き込んで、どんどん、どんどん大きくなっていた。それは、娘が前に治めたことがある大風などとは比べ物にならないものだった。

村は為すすべなく、大風に飲み込まれて行く。

命の水をたたえたあの池が…

おじいちゃんの耕した畑が…

みんなと遊んだ川辺や山が…

そして、産まれ育つたらしい我が家が…

目の前にあつたすべてが、今、この瞬間、過去になるうとしていた。

(あたしは、なんでこんなものを見なくちゃいけないだろう…)

召鈴の目には、涙があふれんばかりにたまっていた。それでも、目の前の光景から逃れることは出来なかった。

背中に人の気配を感じて、召鈴は我にかえた。振り向くと、そこに魯成が立っていた。涙をかくしもせずに。

娘はその顔に向かって、何度も何度もうなずいていた。

次の日、あの村から南へ数十里行ったところに、百人からの集団があった。

先頭は女性。こごつぱりとした胡服の上下を着て、髪に小さな羽根飾りをつけている。その隣には、さらした木綿布の上にボロの胸当てをつけた男がいた。一団は隊列乱さず、南へ、南へとひたすら歩いていった。

あてのない旅である。それでいてこの規律正しさは、みながすべて指導者を信頼している証拠であった。今の指導者は、村長ではない。村長はすでに一人の老人に戻り、すべてを二人の若者に托していた。召鈴と、魯成に。

昼を過ぎ、陽がすこし和らいたので、昼食となった。食事のしたくが出来て、魯成とともに食事をしようとしていた召鈴の許に、もと村長だった老人が駆

け込んできた。

「風師どの！一大事じゃー！」

「おちついて。どうなさったんです？」

老人は娘の声にやや落ち着いたようで、声を落して言った

「北の空に、砂煙が立っております。あれはどう見ても人馬のもの。あの大風から逃れた者がこちらに来ているのは……」

若者二人は顔を見合わせた。やがて娘が向き直って、「分かりました。私が、何とかいたしますよう。……」

このことは、他の人には内緒ですよ」
老人は顔に喜色を浮かべ、大きく頷くとともに席に戻って行った。

後に残された二人はしばらく黙って食事をしていたが、ふと、二人同時にさじを置いた。男の方が先に口を開く。

「なぜ君が……！」

「わたしは颯じいちゃんから頼まれてるのよ。……大

丈夫、わたしにはこれがあるから」

そう言つて髪にさしている羽飾りのようなものを撫でた。相手の顔も見ずに立上り、くるりと後ろを向いてしまふ娘の姿は、もう引き留められないと語つていた。

「きつと歸つて来るよね」

「ええ、必ずね」

召鈴は背中であう言つと、逃げるようにその場を離れた。

そしてそのまま砂煙の方へと向つて行つた。

十四

砂煙はもう程近い。馬と人の影がうつすらと見える場所で、召鈴は立ち止まった。真つ直ぐ前を睨んでいだ目が、ふと緩む。

「ごめんね、魯くん。わたし、あなたを死なせたくないの」

ささやくようにつぶやきながら風羽を髪から外し、すつ、とそれを空へ掲げる。手を放せば、すぐに終る。でも、それができない。

「悲しむわね、きつと。ごめんね。ちょっとだけ悲しんで、すぐに忘れて……ね……」

いっばい涙を浮かべてた目を見開いて、今度こそ手を放そうとした瞬間、心の中から声がした。

(やはりわしの孫じゃな……)

「颯じいちゃん!」

(恋しい人を救うために、相手が悲しむのを覚悟の上での決断か。よくわかった!)

娘は、顔が真つ赤になつていくのを抑えられなかつた。

「颯じいちゃん、嘘までついてあたしをもて、あそんだの?」

(いやいや、そんなつもりはないぞ。単にその…風に巻き込まれ損ねて、この風羽にたどり着いただけじゃ)

19 第二回 大風の吹いた日

照れ隠しのような笑いに、娘の力が抜けた。

「ひとこと言ってくればいいのに……」

(いや、お前さんの覚悟が見たかつたんじゃよ)

その瞬間、握るのをやめた娘の手から風羽がふわりと離れた。

(今度こそ本当のお別れじゃよ。)

これで、この世に風の使い手はいなくなる……

新しい時代、新しい村、そして新しい人々を作り出すのは、召鈴、お前たちの仕事じゃ。それこそ、今とは比べ物にならないほど重大な決断を下せにやならん。今日の勇気を、いつまでも、大切に。じゃ……)

「じいちゃん……」

叫んだときには、風羽ははるか北へ飛んで行ってた。

しばらくの後、砂ほこりのまん中に、大きな竜巻が二つ生まれた。竜巻は人馬を宙に舞わせながら、互いのまわりを踊るかのようによく回り回っていた。

そして、娘の心に微かな声が届いた。

(ずいぶん待ったわよ)

(待たせたの。ありがとう……ありがとう)

声が途絶^{とだ}えた後も、召鈴はずっと、ずっとその渦を見つめていた。

一陣の風が、彼女の頬をなぶっていった。このときはじめて彼女は気づいた。風が、もう仲間ではないことに……

くるりと振り向くと、今の仲間たちのもとへと足を運んだ。その先に、魯成の笑顔が見えたような気がした。

第一版あとがき

や～、おわったぁ！

現在、12/28午後11時です¹。これからコピーを取ってきて、ようやく完成になります。一時はどうなるかと思いましたが、何とかなるもんですね。

魯成：「ったあく、のんきに構えやがって。話自体はずっと前に出来てたんだろうが！」

はい。そうです。後半部分なんかは、91年夏コミ終了直後には出来上がってました

召鈴：「『風の末裔』と一緒に書いてたの？」

いや、そじゃなくて...ほれ、『末裔』はドラクエ4聞きながらやってたって言うてたでしょう。

召鈴：「オーケストラバージョンね」

そう。で、リピートで何度も何度も聞いているうちに、話がまとまっちゃったんだよ。

魯成：「なんだ、そりゃ!？」

CD持ってたならこんな風に聴いて欲しいんだけど...

戦闘 - 生か死か -

エレジー

不思議のほこら

馬車のマーチ

ね、こうすると、後半の展開そのままになる。

召鈴：「文章力ないわね～！ “不思議のほこら”なんて、感動の名場面になるじゃないの」

¹ 平成三年冬コミの前日でした

21 第一版あとがき

しなかったの！書いてて恥ずかしいんだぞ。

魯成：「物書きの言うこっちゃない！」

はいはい。で、と。風使いの話は、一応これでおしまいです。颯や香風、召鈴に魯成が出てくることは、もうありません。

魯成：「そうなのか？」

召鈴：「残念ね～。もうちょっと動きまわりたかったのに」

オチがついちゃったからね。大体、これのおかげで、ほかの話がみんな滞^{とどこお}っちゃってるんだぞ。ちっとは考えてくれよ。

召鈴：「と言いながら、結構気に入ってるのよね、あたしたちのこと」

まあ、みんなまっとうに動いてくれたからね。できたら、ほかの話にも遊びに来て欲しいよ。もちろん、風使いの役にはしてあげられないだろうけど、ね。

それじゃ、またよろしく！

召鈴・魯成：「お疲れさま！！」